
ハイヒール

あゆみ

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハイヒール

【Nコード】

N9666R

【作者名】

あゆみ

【あらすじ】

守ってあげなきゃいけなかった年下の幼馴染の男の子。どうやら、身長が追い付かれました。たみたいです。

二つ年下の、幼馴染。

大きな瞳はぱっちり二重、小さな唇はさくらんぼみたいにふくらつやつやで、髪はふわふわ。ワックスを付けていないとあちこち撥ねてしまう猫っ毛。本人は嫌だと言うけれど、ワックスなんか付けないほうが柔らかくって私は好きだ。

小さい頃は一緒に手をつないで幼稚園に行つたし、小学校の時も手をつないで登下校していた。怪我に絆創膏を貼ってあげて、いじめっ子を追い払って、いちいち世話を焼いて、要するに、当時の私は女の子みたいな彼を守って大事にすることでお姉さんぶりたかつたのだ。

平均よりも小柄で、女の子より女の子みtainな顔をしてて、可愛くて。『私が守ってあげなかったら駄目なのよ』みたいな気持で、彼は私の大事な大事な弟分だったのだ。

なのに、全く腹が立つ。

歩くスピードが、彼の方が早くなってしまった。体力も、今では彼の方が上。私と同じ高校を受けて、私と同じ部活に入って、小さい頃とおんなじように私の跡を追い掛けて、なのに彼はどんどん変わっていく。変わってしまう。

「——ねえ、今、身長幾つ？」

いつもと同じ、並んで歩く下り坂。なんだか並ぶ影が同じ長さをしているように見えて、私は彼に身長を問う。大学一年生と、高校二年生。去年までは確かに、私の背の方が高かった。

「身長？ 幾つだったかなあ？」

んー、と考えて、彼は一六五くらい？ とそう言った。

「……そう」

並ばれた。

？

二つ年上の、幼馴染。

すつきりとしたアーモンド型の眼に、綺麗な弧を描く薄い唇、すらりとした綺麗な長身に、さらさらつやつやの綺麗な黒髪。長くてすごく綺麗なだったのに、邪魔だからとばっさり切ってしまった時は、とても悲しかった。長くのばしていた時は、まるでお姫様みたいだっと思っていたから。

もっとも、いじめっ子たちから僕を守ってくれていた彼女はとても格好良くて、たまにナイトか王子様のような思った事もあったけれど。でもこれは、彼女には内緒。お姉さんぶろうとして背伸びしている彼女はとても可愛いから、僕はいつまでも『可愛い弟分』でいなくちゃいけないのだ。そうじゃないと、彼女はきっと僕から離れて行ってしまうから。

彼女をつなぎとめておきたいと、傍に居たいと、出来る事なら抱きしめて口付けしても許されるような関係になりたいと、そんな事を考えているのに、僕がしているのは弟分に徹する事。矛盾してるなあ、と彼女の隣を歩く度にそう思う。

だけど多分、きつともうぎりぎりだ。

小さな頃は彼女の方が体力だっであつたし、歩く速さも、身長も、全部僕よりも上だったのだ。それが最近になって、崩れてきている。彼女と歩く時、僕はいつも少し歩調を緩める。彼女が重い荷物を持っているいたら、僕が手を貸してあげる。彼女が重いと言うものが、僕にはあまり重くは感じなくて、力でも僕の方が勝ってきたのだと言う事に気がついた。

彼女もきつと、そろそろお姉さんぶる事が出来なくなってきた。昔は持つてもらっていた荷物は、僕が持つようになった。教えて貰っていた勉強も、一人で出来るようになった。多分彼女は、そう言

う事全部、気にしている。

「——ねえ、今、身長幾つ？」

いつもと同じ、並んで歩く下り坂。何だか少し思いつめたような顔をして、彼女は僕にそう聞いてきた。

「身長？ 幾つだったかなあ？」

少し誤魔化すように、笑って見せた。だけど早く答えなさいよとも言うように睨むから、んー、と考えた振りをして、一六五くらい？ とそう答えた。

「……そう」

悲しそうに、彼女は小さく呟いた。

2

すつきりとしたアーモンド型の眼に、綺麗な弧を描く薄い唇、さらさらつやつやの綺麗な黒髪。

翌日会った彼女は、いつもと同じなのに、いつもより目線が高かった。

「……それ、どうしたの？」

ちよつと得意げに、彼女は笑う。そして、「新しい靴を買ったのよ」とそう言った。

「可愛いでしょ？ 私にはちよつと大人っぽいかなー、って思ったんだけど、店員さんに良くお似合いですよって勧められたから、ついでね。買ったかったの」

良い訳みたいにして早口で喋る彼女の足元を飾るのは、黒いエナメルのパンプスだった。かかとの部分に上品な白のレースがついた、綺麗なパンプス。ヒールの高さは約十センチ。

「綺麗な靴だね」

「ありがとう。……ふふっ。この身長差、久しぶりね」

言われて、ちよつとだけ悔しくなった。

「すぐにまた追いつくよ」

「負け惜しみなら一七五センチを超えてから言ってちょうだい」

「絶対越してやる」

でもきつと、すぐに追いつくよ。だって僕はまだ、伸びているんだから。僕は今まさに成長期。夜毎、骨がきしきしと軋むのだ。一七五センチくらい、すぐに超してやるさ。

「いつになるかしらね？ 所で、ちよつと腕貸してくれない？ この靴、ヒール高くて転びそう」

「無理しなきゃいいのに」

腕を貸せば、嫌よ、と彼女は呟いた。

「いつでも目線の高さが一緒だなんて、そんなの、ときどきするじゃない」

その言葉に、思わず目を見開いた。驚いた。そんな素振り、一度だつて見せた事なんて無かつたのに。

だから貴方の目線が確実に私よりも上だつて分かるまで、私はハイヒールを履き続けるわ。そう言つた彼女の顔は少し赤くて、そんな顔を覗きこむ事の出来るこの身長差も、悪くないかもしれないなんて思つてしまった。

「……ははっ」

「なによ」

「何でもない」

もう一度彼女の顔を覗きこんで、僕は微笑んだ。多分、これまでにないくらいの満面の笑み。

「一七五センチになったら、僕のお姫様になつてよ」

「……なによ、自分の方がお姫様みたいな顔してるくせに。あんたに王子は不相応よ」

大きな瞳はぱっちり二重、小さな唇はさくらんぼみたいにふつくらつやつやで、髪はふわふわの猫っ毛で、そんな王子様なんか見たことないわ。

意地悪にそう言うと、彼女はふいつとそっぽを向いた。

取り敢えず、彼女は否定しなかつた。僕が一七五センチになったら、

その時は覚悟しといてね、お姫様。
そんな事を思いながら、僕はまた小さく笑った。彼女に何よ、と小
突かれながら。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9666r/>

ハイヒール

2011年4月2日12時54分発行